

二〇二四年一〇月一七日

千枚の棚田はいまし豊の秋
倒木に塞かれてしづく秋の川
どこまでも歩めど尽きぬ花野かな

宏 虎

みちほ

さつき

二〇二四年一〇月二日

里山に色をちらして秋深む

みちほ

二〇二四年一〇月一日

二〇二四年一〇月一六日

小流れに沿ひゆく径は草紅葉
文机に紅葉明かりや写経場
内海の一島しるき蜜柑色

三 刀

なつき

宏 虎

二〇二四年一〇月一五日

秋深し卒寿の母と有馬の湯
首塚にじつと佇む秋の人
寺々を巡りて郷の秋惜しむ

ともえ

なつき

つくし

二〇二四年一〇月一四日

東の間の夕日に淀の秋惜しむ

菜 々

二〇二四年一〇月一三日

台風裡新聞配るバイク音
台風来任地の吾子を案じけり
しなやかに風いなしをる芒原

かかし

菜 々

みちほ

毎日句会みのる選・二〇二四年一〇月一九日